

蹴鞠についての研究－中国古代史料に基づいて

郭 新宇

1. はじめに

サッカーは世界中で最高に人気のスポーツであるが、このサッカーの起源はいつであろうか。世界各地の民族の歴史の中で足で操作するボールのゲームは多く見られる。「蹴鞠」は最も古いボールゲームということがすでに世界で認められている。蹴鞠というのは革のまりを地上に落とさないように足で蹴って次々に渡す遊びである。渡辺融の『蹴鞠の研究』は、「現存する蹴鞠書の編者、著者たちや近代の史家たちも、蹴鞠は中国大陸からの伝来としていることでは一致している」と述べている。これによれば、日本の蹴鞠は中国から来たと考えられる。

漢代の画像石は漢代墓室、祠、石棺の上に彫刻したものである。主に墓室の所有者の身分、社会地位及び当時のある信仰に関することを表す。ほぼ西漢末期から(前30年)東漢末期(220年)にかけての250年の間に流行した。20世紀の初め、日本は漢代画像石についての近代考古研究を行い、多くの研究成果もある。例えば、長広敏雄の『漢代画像石の研究』などである。学者たちはこの画像石の研究を通じて歴史、天文、建築、美術などの各分野で重要な研究成果が出てきたとしている。そして、多くの研究成果は体育の領域で採用されているが、その中で、蹴鞠についての研究は少ない。しかし、漢代画像石の「百戯図」には蹴鞠の図がよく見られる(百戯の中で武術、相撲、踊り、雑技、蹴鞠などが行われる)。漢代の画像石は現代までおよそ2000年の歴史があるが、この画像石に記録された蹴鞠の画像は蹴鞠の記録の中で最も古い画像であろう。そのため、この画像石は蹴鞠の歴史の研究について重要な価値がある。

古代中国の文化はアジアおよび世界に深く影響を与えた。隣国の日本は昔から中国と頻繁な交流があった。蹴鞠は日中にとって特有なスポーツであるが、蹴鞠の研究を通じて、日中の歴史、体育史などの認識を深めたいと思う。

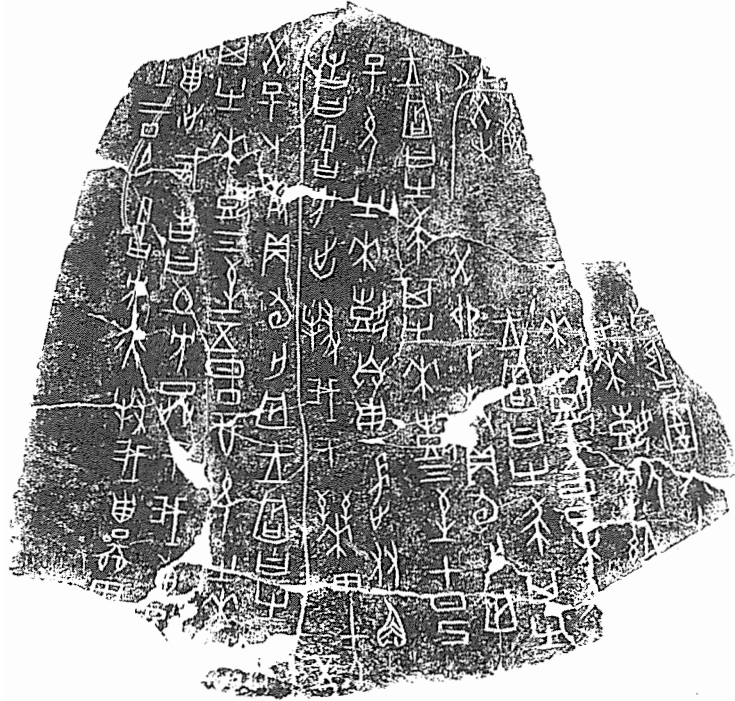
2. 蹴鞠の起源と発展

蹴鞠は中国において「中国古代のサッカー」と言われており、字面から見ると「蹴」は即ち蹴るという意味で、「鞠」は革で作られた球を意味する。「蹴鞠」という呼び名以外に「蹋鞠」、「蹴球」、「築球」などと呼ばれることもある。蹴鞠は漢代以前は「蹋鞠」と呼ばれ、漢代以降に「蹴鞠」と名称が決められた。『齊都蹴鞠』では、各時代に生産力や蹴鞠の発展に伴って、「蹴鞠」の呼び方も変えていたと指摘された（『齊都蹴鞠』30 ページ）。唐代から蹴鞠の名称について多くの呼び方が現れたが、「蹴鞠」と称するのが最も普遍的な呼び方である。蹴鞠の起源について、学者たちは劉向の『別録』と司馬遷の『史記』などや当時の甲骨文字に基づいて、代表的な三つの説に纏めた。

第一は、黄帝が蹴鞠を創造したという説である。黄帝とは中華文明の祖先と言われる、伝説の人物である。前漢の劉向が書いた『別録』によると「蹴鞠者、伝言黄帝所作、或曰起戦国時」（蹴鞠は、伝えて言う、黄帝の作る所、或いは戦国時に起これりと言う）と書かれている。1973年、湖南省長沙馬王堆三号漢墓から帛書「経法・十六経・正乱」が出土し、帛書には「…黄帝身禺（遇）之（蚩）尤，因而擒之。…翦其髮而建之天，名曰之（蚩）尤之旌。充其胃以為鞠，使人執之，多中者賞（黄帝は蚩尤との戦争で勝ったため、蚩尤は殺された。蚩尤の胃にあるものを入れ、球にして兵士たちに蹴らせ、目標に多く当てた人に賞を与えた）」である。

しかしながら、黄帝が活躍したとされる時代に関する文献や出土した文物が少ないため、本当に黄帝が蹴鞠を創造したのかを現在は立証することが難しい。したがって、黄帝が蹴鞠を作ったという伝承について、当時の文献や出土品が少ないことから、何かものに記録して伝承されていったのではなく、基本的に人から人へと言い伝えることで伝承され、拡大していった可能性が高いのではないだろうか。この帛書の時代から推測するに、少なくとも前漢の前期にはこの「黄帝が蹴鞠を創造した」という説が成立したのではないかと思われる。

第二の説は、殷商の時代、占いの際に誕生したというものである。



6057 正

甲骨文（『甲骨文合集』6057号）

甲骨文は亀甲や獣骨に刻まれた中国殷代の文字であり、紀元前15世紀頃から使われたと考えられる。現存する文字の中で最も古い中国の文字とよばれ、占いや記録に用いられた。甲骨文の発見について白川静の『甲骨文字の世界』によれば、「中国の本草学は、この■の古い知恵のあり方を象徴するような不思議な薬学である。鳥獣草木などあらゆる種類を含むこれらの薬物は、みなひとかどの効能書きをつけて薬舗に売られていた。その中にえたいの知らぬ古骨が、竜骨などと称して店先に並べられていたものである。アンダーソンが大陸最初の原人、北京人の遺址を発見したのも、その竜骨出土の遺址を求めたのがきっかけであった。そして甲骨文の発見も、同じく薬舗にさらされていた竜骨の破片が、それを教えたのである。中国における世紀的な発見とされる周■店と安陽の遺址が、ともに竜骨の話から発展して世にあらわれたのは、不思議な縁といえよう。」とされている。

上の図の甲骨文字の上の図の赤い部分の「𠄎」という字について、ある研究者の説によると、その字は「鞞」と判断され、何かしらの儀式の踊りの様子を表したものだと考えられた。また、ある学者の説ではこの字は「征」ではないか、と判断さ

れた(『斉都蹴鞠』23ページ)。商承柞の注では「此征之義為巡狩，為行，非征伐」(この「征」の意味は狩であり、征伐の意味ではない)と指摘している。陳夢家は「卜詞征伐方国亦曰𠄎」(卜詞の中において方の国を征伐することも𠄎である。)と指摘している(甲骨文字詁林810ページ)文献や甲骨文字の使い方や文字の形から、この文字を「鞠」と解釈する説は誤りではないかと推測した。

第三の説は、戦国時代に斉国の臨淄というところで誕生したという説である。『戦国策』齊策に「臨淄甚富而実，其民無不吹竽、鼓瑟、弹琴、擊筑、鬪鷄、走狗、六博、蹴鞠者(臨淄は裕福で生活が充実していたため、芋を吹き、瑟を弾き、琴を弾き、筑を撃ち、鷄を戦わせ、犬を走らせ、六博をして、蹴鞠をしない者はいない)」と記録されている。『史记』蘇秦列伝にも同じ表現がある。

『史記』扁鵲倉公列伝に「安陵阪里公乘項處病，臣意診脈，曰：牡疝。牡疝在鬲下，上連肺，病得之内。臣意謂之、真母為勞力事，為勞力事則必嘔血死。處后蹴鞠，要蹶寒，汗出多，即嘔血。臣意復診之，曰：当且日夕死。即死(安陵県の坂里の公乗で項處という人が病気になりました。わたくしは脈を診みて、牡疝という病気ですと申しました。牡疝の病根が膈膜の下にあって、上は肺にまで連なっていました。病気にかかったのは房事が過ぎたことが原因だったのです。わたしは彼に向かって、体力を使うことはしないように慎みなさい。体力を使おうとすると、きっと血を吐いて死ぬでしょう、と言いました。項處はその後、蹴鞠をして、腰に寒気を覚え、汗をたくさん出し、血を吐きました。わたしはまた彼を診査して明日の夕方には死ぬだろう、と申しました。そのとおりにになりました。)」という物語があり、蹴鞠が臨淄で相当な人気だったことの証であったのではないかと考えられる。

黄帝の起源説は戦争と関係があり、殷商の起源説は占いと関係があり、戦国時代の起源説は人々の娯楽と深く繋がりがある。その三つの説を分析すると、原始社会で球技に似た遊びが現れ、長い年月を経て戦国時代の蹴鞠へと発展したと考えられる。すなわち、起源について様々の説があるが、発展の軌跡を推測すると、その起源はほぼ戦国時代以前ではないかと考えてられる。現存している文献から、蹴鞠の起源がいつであるかについて断定することは出来ないが、戦国時代に斉で盛んになったことは間違いない。

2.1 戦国時代の斉国の臨淄における蹴鞠の起源について

斉とは、周代における諸侯国の一つであり、春秋時代は姜斉、戦国時代は田斉と時代によって区別される。『史記』斉太公世家によると、周の文王に用いられて軍師となり、その子武王を助けて殷を滅ぼすのに大功のあった太公望呂尚が營丘（臨淄）に封じられたことから、「呂氏斉国」と言われたとされている。臨淄について『史記』貨殖列伝には「臨淄亦海岱之間一都会也（臨淄は東海と泰山の間にある都市である。）」という一節がある。また『史記』斉太公世家で「東至海，西至河，南至穆陵，北至無棣，五侯九伯，實得征之。齊■此得征伐，為大■。都營丘」（東は海に至るまで、■は黄河に至るまで、南は穆陵に至るまで、北は無棣に至るまでの間で天下の五侯九伯の諸侯が罪を犯した場合、これを征伐してよろしいと。斉はこれによって諸侯を征伐することができて大国となり、營丘に都した。）と記録されている。

『斉都蹴鞠』によると、紀元前 1045 年、斉太公が臨淄に都を定めた後、薄姑に移された。ほぼ紀元前 9 世紀、斉献公が改めて臨淄に移動してから、紀元前 221 年に秦国に滅ぼされかけた後六百三十年くらいの期間を掛けて繁栄する都市を築き上げていったとしている。『戦国策』斉策によると「臨淄之途，車轂擊，人肩摩，連衽成幃，挙袂成幕，揮汗如雨，家敦而富，志高氣揚」（臨淄へと至る道では、車の車輪がぶつかり、人同士の肩が接触し、服の端が連なり幃となり、袂を上げることで幕となり、汗が飛ぶのは雨の如く、家は裕福で、意気揚々としている。）と記されており、『史記』張儀列伝にも「天下疆国無過斉者，大臣父兄，殷众富楽」（天下の強国で、斉にまさるものはありません。大臣も、王族の長老も富裕安楽を極めておられます。）と記されている。

臨淄の構造について『臨淄斉故城』により「臨淄城は南北の長さが約 4.3km、東西の広さが 3.4km あり、面積はおよそ 14.6 平方メートルである。城壁は土で建造され、城門が 6 つ、7 つの幹線道路が明らかにされた。地下の排水管と城外の堀とが繋がっていた。また、城内で製鉄の遺跡 4 箇所と鑄造貨幣の遺跡 1 箇所が発見された。」と述べている。

歴史の発展の視点から見ると、物事の繁栄は地元の政治、経済、豊かな生活と深い関係がある。齊太公が齊に封ぜられた時に発展の為に積極的な経済政策を採用したことから見ても明らかである。

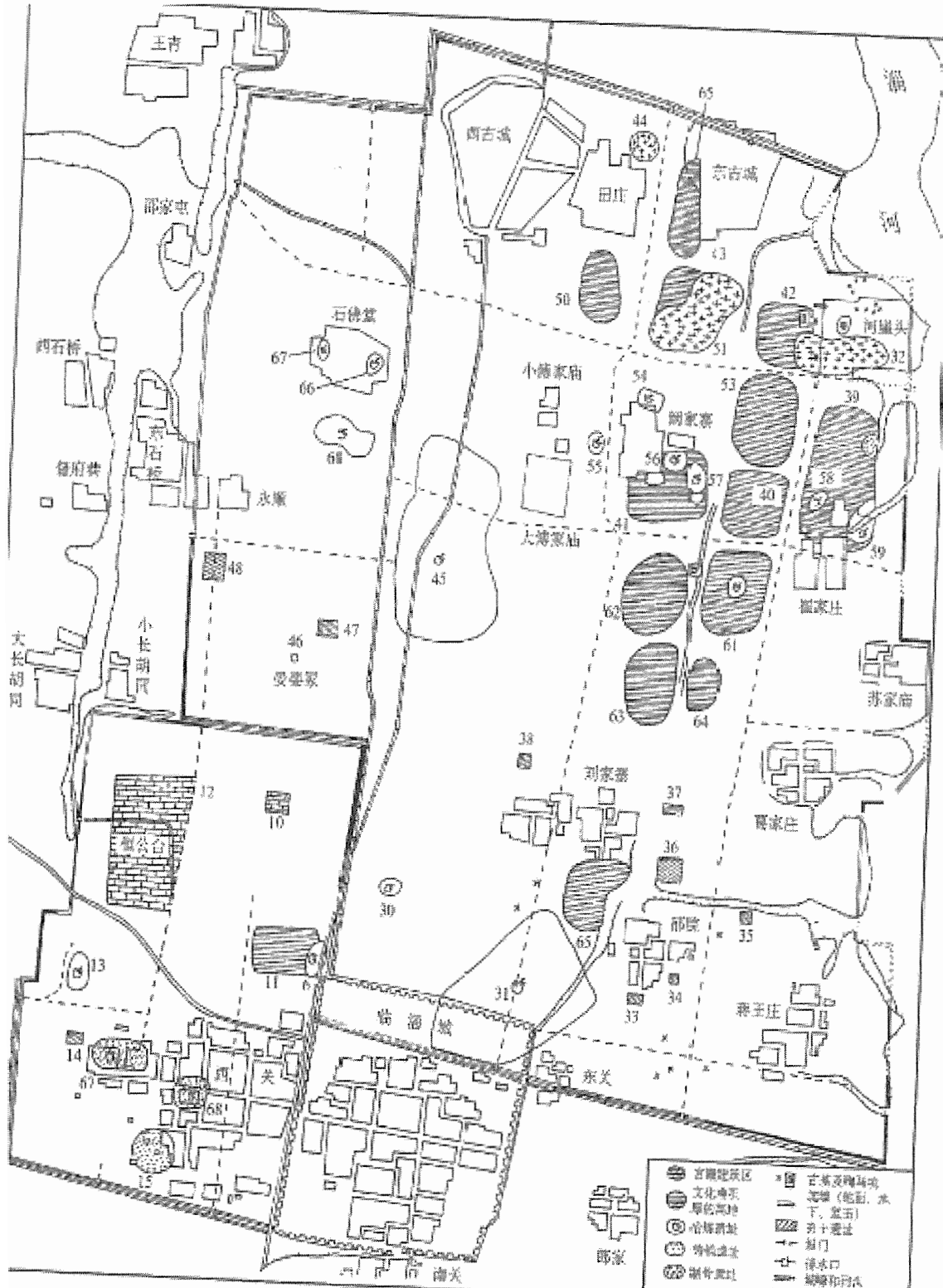
『史記』貨殖列伝によると「上至富國，下至富家。貧富之道，莫之奪予，而巧者有餘，拙者不足。故太公望封於營丘，地瀉鹵，人民寡，於是太公勸其女功，極技巧，通魚鹽，則人物歸之，繼至而輻湊。故齊冠帶衣履天下，海岱之間斂袂而往朝焉。其後齊中衰，管子修之，設輕重九府，則桓公以霸，九合諸侯，一匡天下。而管氏亦有三歸，位在陪臣，富於列國之君。是以齊富疆至於威宣也（農民が収穫しなければ人々は食糧に飢え、職人が生産しなければ人々には道具が不足し、商人が交易しなければ食糧、道具、財貨という三つの宝物の流れが断絶し、漁民や狩民が山沢の資源を提供しなければ人々に財産が乏しくなり、財産が乏しければ山沢は開発されない。この四者は、人々の衣食の源である。源が大きければ生活が豊かであり、源が小さければ生活は貧しい。この道理によって上は国を富ますことができ、下は家を富ますことができる。この貧富の法則はもともとあるもので、誰もそれに手を加えることができないが、この法則に長けた者は財産が豊かで、拙い者は不足する。したがって、太公望が營丘に封ぜられた時、土地に塩分が多く、人民が少なかったので、同地の女性に機織りや裁縫を奨励し、工芸の技術を高め、魚類や塩の販売流通を推進し、その結果、人や物資がそこへ落ち着き、次から次とひっきりなしに各地から集まってきた。よって天下の人々はみな齊の衣冠や靴を身につけ、東海から泰山までの人々は身だしなみを整えてうやうやしく朝見した。その後、齊は一度振るわなくなつて、管仲が立て直し、財務を扱う九つの役所を設立したところ、桓公はこれによって覇をとなえ、何度も諸侯を集めて盟約を結び、天下を正道に導いた。そして管仲自身も国君同様に三人の女性をめとり、位こそ陪臣であったが、各国の諸侯よりも裕福であった。こうして齊国は富強を維持して威王、宣王の時代に至った。）」と述べている。

このことから、管仲の政策は齊が強大になるための基礎を築いたことがうかがえる。春秋戦国時代は中国史において秩序の崩壊の時期、また力が最も重要な時代である。当時の齊は管仲の改革にあたり、臨淄城の発展が新たな機会を迎えてきた。強兵の前に国を富ませることが重要だという認識に基づいて齊桓公は管仲を宰相

に任命し、多くの改革を行った。その政策について馬国慶の「蹴鞠在競技与娱乐中的转变与兴衰」110 ページで次のように述べている。「分臨淄為二十一鄉，士農鄉為十五，工商鄉為六。十五個士農鄉和六個工商鄉分別集中居住，免除工商鄉兵役，使專事本業，承擔軍備和人民生產，生活必備品的生產與銷售。十五個士農鄉則各按軌，里，連，鄉建立行政組織體系，同時又是伍，小戎，卒，旅的軍隊組織體系。五家為一軌，每家出一兵，五人為一伍，由軌長率領。十軌為一里，共五十人為一小戎，由里司率領。四里為一連，共二百人，由連長率領。十連為一鄉，共二千人為一旅，由鄉良人率領，五鄉共一萬人成一軍。士農十五鄉編為三軍……把行政組織與軍隊的編制融為一體，這就使作為兵源的士兵，平時能夠按軍隊編制進行習武，組織訓練。（臨淄を二十一郷に分け、そのうち士農郷は十五、工商郷は六であった。十五の士農郷と六の工商郷がそれぞれ集中させ、工商郷の住民は軍備と生産及び生活用品の生産や商売に従事するために政府に兵役を免除された。十五の士農郷はそれぞれ軌，里，連，郷という行政単位により組織を立て、また軍隊の編制により伍，小戎，卒，旅という単位を立てる。五つの家は軌に為り、各家に一人を選び、五人を一伍とし、軌長を設置する。十の軌は一里、合計五十人は一小戎、里司を設置する。四つの里は一連、合計二百人を連長が率いる。十の連は一郷、合計二千人を一旅、郷良人を設置する。五つの郷合わせて一万人を一軍になる。士農十五郷は三つの軍を立てる。……行政組織と軍隊の編制を合わせるという政策は兵士達に普段から軍隊の編制により訓練することができる。）」

經濟の發展のために、開放的な政策を採用した、齊に来る商人達に「徴于市者，勿徴于関、徴于関者，勿徴于市（市に徴すときは、関に徴すこと勿れ。関に徴すときは、市に徴すこと勿れ）」という減税の政策を作った（蹴鞠在競技与娱乐中的转变与兴衰 103 ページ）。また、齊国が外来商人の利益を守るために「有司」という機関が設置され、多くの規則が作られた。この規則によると、齊国の国内に 15,000 メートルごとに駅を設置し、外国の商人に馬を替えさせたり、食事や宿泊を提供したりする。もし商人が馬車一台を持ってくると、駅が商人の食事を無料で提供する。また馬車三台以上の場合は食事を無料で提供するだけでなく、馬の飼料も提供するというものであった。

数百年に渡る発展により齊は、戦国時代、都の臨淄を中心に経済や文化など栄華を極めた。したがって、齊の臨淄のように繁栄した都市が蹴鞠の普及に必要な要素であった。



臨淄故城 1964-1966 年勘探図 (『臨淄齊故城』17 ページより)

臨淄を含めて斉国の周辺地域が「斉地」と呼ばれ、先史文明を誕生させた。考古資料により、斉地で新石器時代は五つの段階を経て、即ち後李文化、北辛文化、大汶口文化、龍山文化、岳石文化である。『斉都蹴鞠』は「後李文化は現在から約 8,500 年前に起こり、この時期の斉地の住民は陶器や石の器具などの製造技術をマスターした。北辛文化は現在から約 6,300 年—4,000 年前で、この時期の住民は陶器や石器器具の技術をさらに上達させ、生産力の発展に伴って人々の生活が豊かになった。大汶口文化は現在から約 6,300 年—4,600 年前に起こり、この時期の住民の穿孔、彫刻、製陶などの技術は熟練したものだ。牧畜業と農業の分離をこの時期から始めた。また、この時期の住民は生活を記録するための記号を発明し、占い方法を編み出した。大汶口文化の晩期、ある部族の中に階層という意識を生み出し、私有制度もこの時期から芽ばえた。龍山文化は現在から約 4,600 年—4,000 年前に起こった。この時期の製陶の技術は新たな道具を使用し、製造された陶器の色や形などは高い水準にあった。また、鑄銅や建築の技術を生み出したというのはこの地域が文明時代に入った証である。」と述べている。即ち、臨淄城が建築される前にこの地域の文明は既に発達し、相当的な文化が蓄積されていた。

斉国の都としての臨淄は当時、農業や商業が発達し、文化、経済、軍事、体育など様々な面で繁栄した都市で、「海内名都」と呼ばれた。司馬遷も臨淄城の規模に感心して、「吾適齊，自泰山屬之瑯邪，北被于海，膏壤二千里，其民闢達多匿知，其天性也。以太公之聖，建國本，桓公之盛，修善政，以為諸侯會盟，稱伯，不亦宜乎。洋洋哉，固大國之風也。（われは斉におもむき、泰山から瑯邪に連なるまで、北に海をかぶり、肥沃な土地が二千里ある。その人民は闢達で知識を表に出さないものが多い、その天性なり。太公望（呂尚）の人格者を以って国のもとをつくり、斉桓公の繁栄した時期には善政をおさめ、諸侯を以って会盟し、伯を称した。当然のことである。広々として、まことに大國の風格なり。）」（史記・斉太公世家）と言う。経済の繁栄は娯楽文化の発展のための豊かな土壌を作り、蹴鞠はこのような社会のもとで発展していった。

2.1.1 臨淄齊故城についての考古調査

1958年、山東省文化局が臨淄城に1ヶ月の調査を行った。調査の結果は臨淄城主に大城と小城を分け、小城は大城の西南部にあり、その東北部は大城の西南のところに延伸し、したがって、大城と小城は下の図のような形で繋がっていた。古城の四角が発見され、その範囲がほぼ分かった。

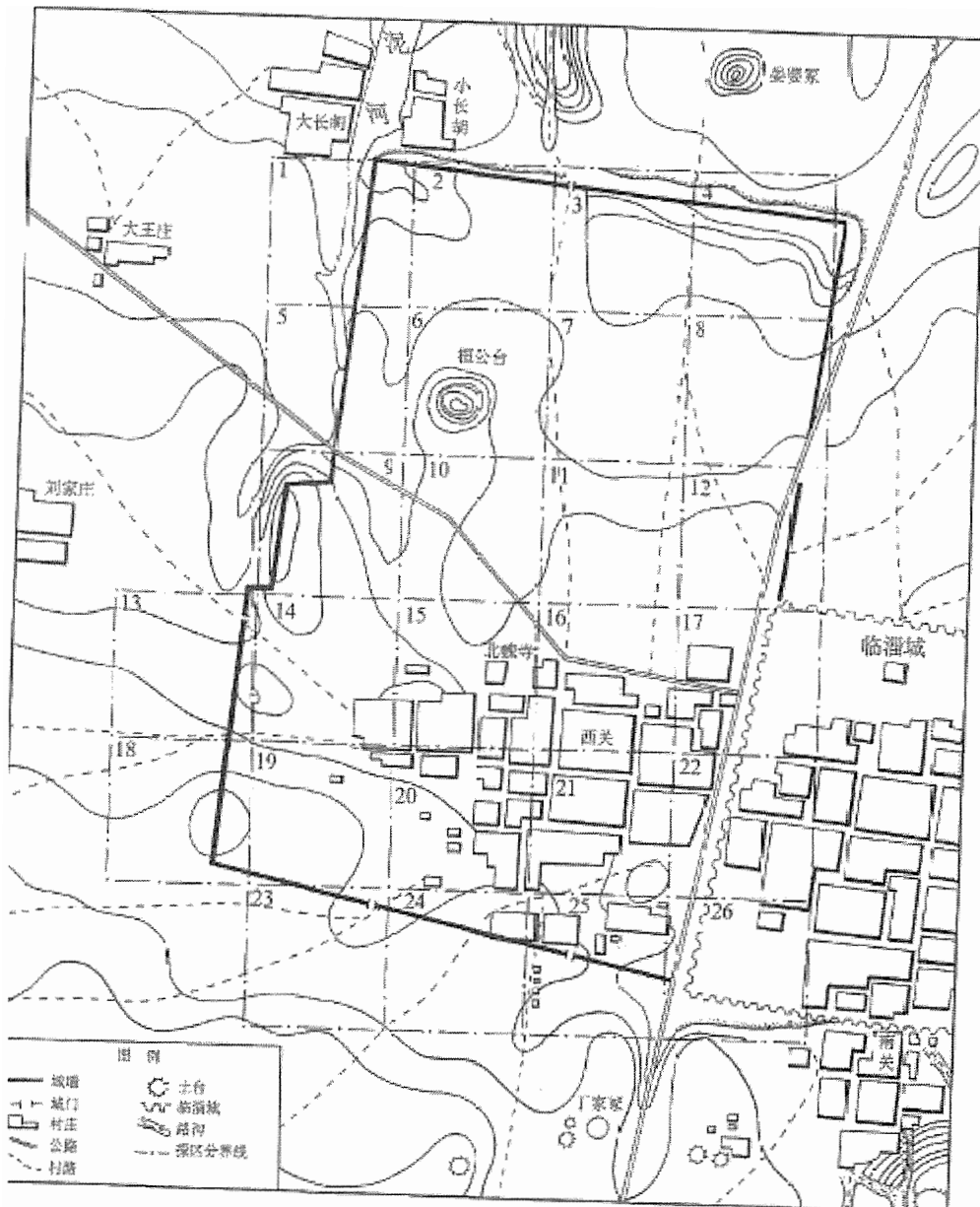


臨淄故城 1958年勘探図（『臨淄齊故城』16ページより）

城壁の範囲を分ったため、1964年7月から1964年10月の間に2■の調査を行った。調査の結果は『臨淄齊故城』の20ページで次のように書いている。

一、小城について

小城の形は不規則で、東、南、北の壁は立ち、西の壁は二つの直角の曲がりがある。下の図のように不規則な四角形に見える。北の壁の長さは1,404メートルあり、その広さは五ヶ所での計測によれば、東から西に80メートル、320メートル、600メートル、920メートル、1,280メートルの地点の幅はそれぞれ55メートル、55メートル、67メートル、48メートル、49メートルである。東の壁の長さは2,195メートルあり、南の壁と西壁の長さはそれぞれ1,378メートル、2,274メートルある。

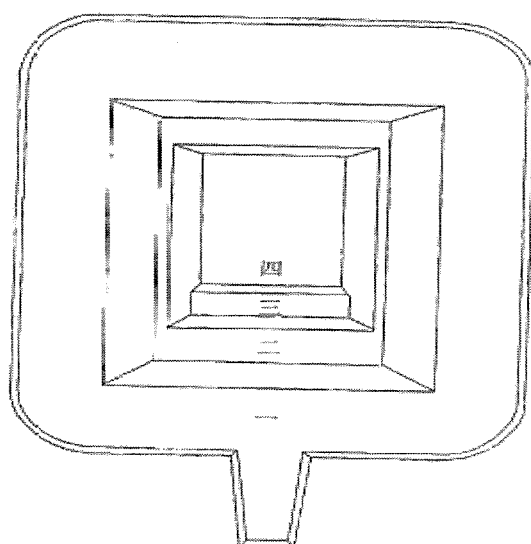


1964年齐故城小城的平面図（『臨淄齐故城』18ページより）

小城の城門は5つあり、北の壁に一つ、西の壁に一つ、南の壁に二つ、東の壁に一つである。城内に3つの主要道路が発見された。小城の排水システムが小城の西北方向に設置され、地元の人に「運粮河」と呼ばれた川と繋がっていた。また川と排水口の繋がる地点に巨大な石が発見された。したがって、この「運粮河」という川は齊古城小城の主要な排水川だと推測された。

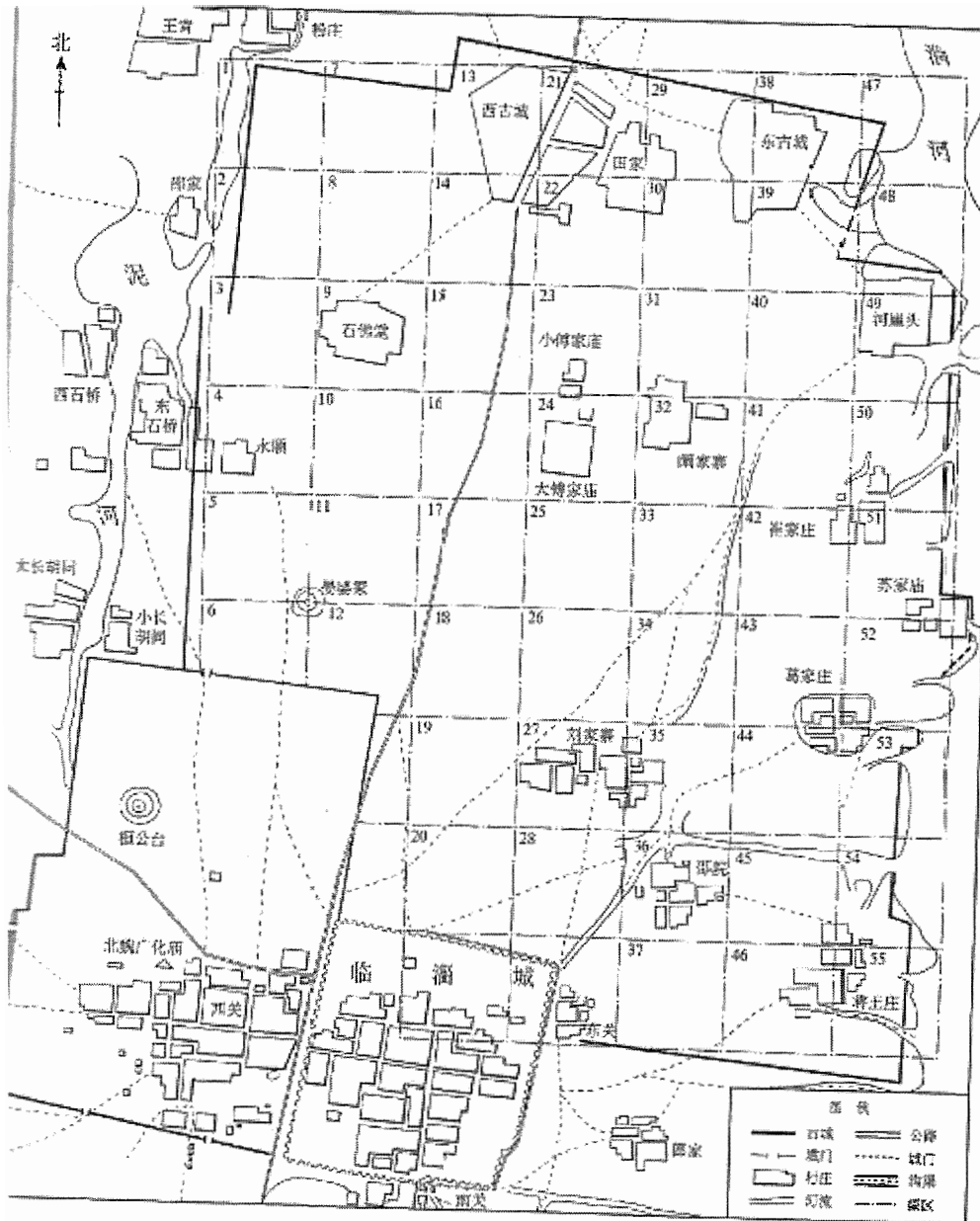
また、小城内で铸铁、铸铜、铸造貨幣などの遺跡が発見された。1ヶ所所は小城の西城門の東北200メートルで铸铁の遺跡は二箇所で見られ、東西の長さは120メートル、南北の長さは180メートルあり、面積はほぼ21,600平方メートルである。もう1ヶ所は小城の東門の南から200メートルのところで発見され、この遺跡の長さは約70メートル、広さは約60メートルあり、面積は約3,500平方メートルである。铸铜の遺跡は2ヶ所発見された、1ヶ所は小城の南にあり、東西の長さは約80メートル、南北は約100メートルあり、面積は約8,000平方メートルである。もう1ヶ所は小城の中央にあり、東西の長さは約150メートル、南北の長さは約100メートルあり、面積は約15,000平方メートルである。

また、小城の北部で「恒公台」と呼ばれた建築の土台が発見され、小城の西の壁まで約300メートルある。この「恒公台」の周りに多くの建物の土台と煉瓦で作られた道路などの遺跡が発見されたため、この辺に「恒公台」を中心に大面積な建築群があると判断され、総面積は32.5万平方メートルである。



恒公台土台復元図（『臨淄齊故城』32ページより）

二、大城について



齐故城大城の平面図（『臨淄齐故城』37 ページより）

大城の調査はほぼ小城の調査が完成してから展開されたが、1964年から1965年までの1年以内で大城に対しての調査が行われた。大城の調査作業の流れは小城と同様にまず城壁を探し、次に城内の遺跡を調査するというものである。その調査は、4つの段階に分けられた。第一段階は1964年下旬、大城東北部の河崖頭村の西での小規模の調査である。1965年3月、東辛道路の建築に伴う道路の両側の遺跡を調査された。第二段階は大城の西での調査である。第三段階は1965年11月から12

月まで大城の東での調査である。第四段階では、1966年前半に、重要な遺跡や道路、排水口などを再調査した。

大城の形は長方形と見えるが、北の壁は全長 3,317 メートル、西から東まで三段に分けられ、その三段の長さはそれぞれ 900 メートル、324 メートル、2,093 メートルがある。東の壁の近くに淄河があるが、水流や地形の影響のため、この壁は他の壁と比べると曲がりが多い。東の壁の全長は 5,209 メートル、調査によると、九段に分けることが分かった。第一段の壁の長さは 455 メートルがあるが、地元の人から「飲馬沟」と呼ばれた川によりほぼ 50 メートル破壊された。南の壁の長さは 2,821 メートルである。西の壁は全長 2,812 メートルであり、壁の南端で約 750 メートルの壁は他の壁よりよく保存されている。調査により、大城の北、南、西の壁で城門はそれぞれ三つ、二つ、一つで、東の城門がすでに破壊されたが、城内の道路を探し、壁の穴と繋がっているため、ここに城門があることが、明らかになった。

大城の西の排水システムは城内の南北方向の川を活用し、大城の北の排水口と繋がり、全長 2,800 メートルである。また、この川の北部で長さ 900 メートル、広さ 20 メートルの支流が発見され、大量の水を排出するため、この支流が掘られた可能性が高い。

前の調査によると、古代臨淄城は他の都城と同じように大城と小城と組み合わせで構成され、異なるのは臨淄城の小城は皇厓であるということである。大城から離れるような形であるが、僅かに小城の東北の部分が大城と繋がっていた。考古資料により、臨淄城は何回の改築を経て、現在の規模に発展した。『臨淄齊故城』の調査によると、九つの時期に分かれることが明らかになった。

臨淄に対する考古調査及び『史記』の中において当時の齊国の様子について記している内容から、当時臨淄は戦国時代の頃にはすでに経済繁栄の都市となったことが判明した。臨淄の西の黄河流域周辺は「中華文明」の起源地と呼ばれた。多くの先行研究から中華文明は様々な要因があって生まれたということ認められ、特に山東省内の黄河の下流の辺りは中華文明に対して重要な地域であるとされている。すなわち、蹴鞠が臨淄で盛んになった原因として、経済の繁栄及び長い年月をかけ

て蓄積された豊潤な文化が基盤にあったからではないかと考えられる。これらの要
■によって、蹴鞠は発展し、各地に伝播されていったと考えられる。

中国数千年の歴史の中で重要な伝統文化であった蹴鞠は、古代社会の各階層の人の需要を満たした。蹴鞠の発展から見ると、蹴鞠は軍事訓練からますます統治階層と人民の生活に溶け込み、中国伝統文化の一つとして現在まで伝わったのではないだろうか。